『東京ヘテロトピア』演出ノート

東京にいながらにして東アジアを旅する。

参加者にはガイドブックと携帯ラジオが渡され、あとは参加者の興味と都合で自分だけの旅をアレンジしていく。ガイドブックを調べ、行きたい場所に行く。訪問地はレストランやカフェや商店や公園といったパブリックな場になるはずで、そこで携帯ラジオを指定の周波数に合わせる。すると声が聞こえてくる。（チャンネルは必ず二つ以上あって、一つは日本語、もう一つはその場所に縁のある言語。）語られるのはその場所についての物語であったり、その場所に生きた人の物語であったり、あるいはその場所と関係の深い都市や国の物語であるかも知れない。そんな風に東アジアを「旅」する参加者は、東アジアの様々な都市や国を、それ以上に東京を、旅をはじめる前とは別の目で眺めることになるだろう。

以上が「公演」の概略だが、今回は作るプロセスも重要で、以下のようにプロジェクト化したい。

林立騎さんほか翻訳者数名、ドラマトゥルクを目指す学生と東アジアからの留学生たちを招き、ミーティングを繰り返しながら共同作業をしていく。テーマは「東京に暮らした東アジアからの留学生たちの痕跡」。留学生の先輩たちが集った場（旅の訪問地になる）やそこで交わされた対話などを丹念にリサーチ、その成果を場所ごとに一つの物語にまとめていく。物語は東アジアのある国や都市のこれまで知られていなかった側面を浮かび上がらせると同時に、留学生が生きたもう一つの東京をあらわにしていくことだろう。上質なテキストを生み出すことは今回の企画の肝なので、外国語と日本語に熟練し、言語や翻訳の問題について高い意識を持っている一流の翻訳者に入ってもらい、徹底してテキストのクオリティをあげていく。さらに翻訳者・詩人であり、旅の名手でもある菅啓次郎さんにテキストの監修をお願いし、反旅行記としての「旅のテキスト」に仕立てあげてもらう。そうした一連の作業のなかで、「旅」と「翻訳」という概念をいかに拡張していけるかについても思索を深めていきたい。「旅」と「翻訳」は、移動や言語の活動にとどまらず、異文化や他者を受容する際に最も重要かつ有効な方法になりうると思うからである。

またこうした共同作業の成果を、物語とは別の次元で、パブリックに開いていくことも大事な課題である。

約一ヶ月間の会期中、旅の訪問地のレストランやカフェは「臨時ラジオスタジオ」になり、そこで「ラジオ番組」を作っていく。それはフォーラムやレクチャーやシンポジウムといった言論イベントで、実際にラジオで放送できるかは分からないけれど、議論や対話の場を積極的に作っていきたい。

「ヘテロトピア」
哲学者ミシェル・フーコーがユートピアとの関連で使った用語。ユートピアとは存在しない架空の場所のことだが、ヘテロトピアは現実に存在する空間であり、他のすべての場所に対して絶対的に「他なる場所」をいう。

高山 明 ／ Port B